

氏名	秋本 悠希
ヨミガナ	アキモト ユキ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第355号
学位授与年月日	令和3年9月30日
学位論文等題目	〈論文〉 音楽と言葉の面から比較する「トリスタンとイゾルデ」「ヴェーゼン ドンク歌曲集」 ～現実と理想の世界の融合と演奏会構成案～ 〈演奏〉 R. ワーグナー：「ヴェーゼンドンク歌曲集」より「天使」他

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	佐々木 典子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	吉田 浩之
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	萩原 潤
(副査)	青山学院大学	教授		広瀬 大介

(論文内容の要旨)

リヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner 1813-1883) の代表作の一つである《ヴェーゼンドンク歌曲集》は、楽劇《トリスタンとイゾルデ》の習作として作曲されたというのが一般的な意見だ。《トリスタンとイゾルデ》に登場する主要なライトモチーフのいくつかは、《ヴェーゼンドンク歌曲集》のそれと類似している。また、マティルデ・ヴェーゼンドンク (Mathilde Wesendonck 1828-1902) には、残念ながらドイツロマン派の偉大な詩人達の様な詩の才は無かったと言われている。では何故、ワーグナーほどの作曲家が彼女の詩に音楽を付けたのだろうか。ワーグナーのマティルデへの想いを鑑みると、彼は自身とマティルデの秘められた恋愛関係を、《ヴェーゼンドンク歌曲集》と《トリスタンとイゾルデ》という2つの巨大なキャンバス上で、作曲という手段で全世界に発信したかったのではないだろうか。

第一章では、ワーグナー自身をプロフィールする。彼の実生活と彼周辺の人間関係についての情報を共有し、それと楽劇の物語の関連性について論ずる。

研究内容は、

- ・《トリスタンとイゾルデ (WV90)》のおおまかなストーリー解説
- ・《ヴェーゼンドンク歌曲集 (WV91)》
- ・歌曲集が作曲された時期のワーグナーの私生活における人間関係

第二章では、《トリスタンとイゾルデ》の習作として作曲された《ヴェーゼンドンク歌曲集》の第3曲《Im Treibhaus 温室にて》と、第5曲《Träume 夢》について具体的な楽曲の分析を展開する。はじめに歌曲の楽曲分析を行う。次に《トリスタンとイゾルデ》のライトモチーフと、歌曲のモチーフを比較し、その関係性を探る。そしてマルケ王が登場する別の楽劇《マイスタージンガー》のハンス・ザックスの台詞部分を引用し、ワーグナー自身の持つ恋愛観を探る。これらの記述を通し、《ヴェーゼンドンク歌曲集》の理解を深めることをこの章の目的とした。

《ヴェーゼンドンク歌曲集》と《トリスタンとイゾルデ》を分析・比較した結果、これら2つの作品はマティルデとワーグナーの心の結び付きや、愛と死に抱く2人のイメージの相違点が明らかとなった。マティルデとの恋愛によってインスピレーションを得て作曲した《トリスタンとイゾルデ》はワーグナー自身の脚本により、より壮大で悲劇的なドラマへとアレンジされた。この2つの作品は同一の不倫愛のもと作曲されたが、実は、『ヴェーゼンドンク歌曲集』はマティルデの、『トリスタンとイゾルデ』はワーグナーの不倫恋愛下における自己陶酔を芸術的に表現した壮大な交換日記であったのだ。

第三章では、上記の研究結果を基に、二つの作品を一つのコンサートで纏めて演奏する際の曲順と、その理由を記述した。第一章と第二章でまとめた《ヴェーゼンドンク歌曲集》と《トリスタンとイゾルデ》を作曲した頃のワーグナーの私生活。そして、楽曲分析及び内容考察を踏まえ、実際に私がひとつのコンサートとして《ヴェーゼンドンク歌曲集》と《トリスタンとイゾルデ（抜粋箇所）》を演奏するならば、プログラム構成案は以下の通りとなった。

- ① ヴェーゼンドンク歌曲集より第一曲《天使》
- ② トリスタンとイゾルデ第二幕より《愛の二重唱》
- ③ ヴェーゼンドンク歌曲集より第二曲《生まれ！》
- ④ トリスタンとイゾルデ第三幕より《前奏曲》
- ⑤ ヴェーゼンドンク歌曲集より《温室にて》
- ⑥ ヴェーゼンドンク歌曲集より《痛み》
- ⑦ ヴェーゼンドンク歌曲集より《夢》

《ヴェーゼンドンク歌曲集》は元々別の曲順で作曲されたが、今回のプログラムでは、現在出版されている通りの曲順に並べることとした。それは、この出版された曲順がワーグナーとマティルデの実際の恋愛の時間経過に即したものである事に起因する。また、前述の通りワーグナーの実生活とオペラの物語が多く共通部分を持つことから、一連の登場人物の感情の変化の流れを失わないように配慮することは、非常に有益であると考えた。

それを踏まえた上で、今回は更に《ヴェーゼンドンク歌曲集》に《トリスタンとイゾルデ》の抜粋箇所を加える試みをした。オペラの抜粋箇所は、オペラの習作とされる歌曲集第3、5曲と同様のライトモチーフが使用されるオペラ第二幕（愛の二重唱）と第三幕（前奏曲）である。それらを《ヴェーゼンドンク歌曲集》第3、5曲の後に並べる事により、ワーグナーとマティルデの実際の恋物語と《トリスタンとイゾルデ》のその時系列が類似している事、《ヴェーゼンドンク歌曲集》（ワーグナーとマティルデの実際の恋）とオペラ《トリスタンとイゾルデ》（ヴァーチャル）を結びつけようとした彼自身の想いを、視覚的、聴覚的に体験する事ができるようにした。それは演奏家と聴き手両方にとってより具体的にワーグナーの想像していた世界観をイメージさせる手助けとなるだろう。

（総合審査結果の要旨）

2021年7月25日（日）、秋本悠希さんの後期博士課程学位審査（演奏、論文）が行われた。

論文の題目は、音楽と言葉の面から比較する「トリスタンとイゾルデ」「ヴェーゼンドンク歌曲集」～現実と「理解の世界の融合と演奏会構成案～、である。

今回コロナ禍状況の中、留学先のイギリスからすぐに帰国できなくなったことや、海外での資料収集が困難であったこと、当初予定していたプログラムを感染対策の為に変更せざるをえなかったこと、また学位審査本番の一か月前に、予定されていたピアニストの先生の怪我による伴奏者の交代等、障害を乗り越えつつの学位審査となった。

※「演奏」 プログラムは、最初に「ヴェーゼンドンク歌曲集」、次にネッド・ローレム、ロジャー・クイルターの歌曲、最後に「トリスタンとイゾルデ；愛の死」。論文に秋本さんが力説していた、プログラムの形にはならなかったが、逆に、大変シンプルで、しっかりとヴァーグナー作品を味わうことが出来た。また、ローレムと、クイルターは、秋本さんが、英国王立音楽院で研鑽を積み、また、イギリスでも幾つかの舞台を踏んだことによる成果が大変良く演奏に生かされていた。ヴァーグナー作品については、博士課程入学時よりずっと目標にして、研鑽を積んできたが、一つ一つの言葉の持つ意味だけでなく、言葉の動きのメロディー、その言葉のメロディーから生み出される音楽のメロディーがしっかりと一つの物となり、詩の朗読としてのメロディーになりつつあり、素晴らしかった。

今後、この原語が、日本語に訳した意味から発した表現ではなく、その原語そのものを自分の感性から表現して行けるように成長していけることを期待する。

また特筆すべきは、今回ピンチヒッターを引き受けて下さったピアニストの井出徳彦氏の演奏のことである。ドイツ歌曲をメインとしてすでに活躍されていますが、この短期間に英語の作品も併せて全く遜色なく仕上げてくださいました。ドイツ語のテキストを音色で美しく表現し、ソリストの表現力を引き出すべく、しっかり寄り添い、また、ただ合わせるだけでなく自身の音楽の持ち味を出しつつ、二人の音楽がコラボレーションされ演奏会自体の素晴らしい世界が作られていた。まさに、歌曲の演奏会の理想であったと思う。

※「論文」 今般の状況下、先行研究等もう一つ踏み込んで欲しかった。物足りなさが残ることは否めない。演奏者として、またヴァーグナー作品に対する思い入れはよく分かったが、少し、表現が漠然としている。主観的、感覚的なことを文章にするのは難しいが、もう少し、秋本さん自身の強い持論が書かれていて欲しかった。今後も、ヴァーグナー作品にかかわって行かれるでしょうから、今後に期待する。

演奏、論文の総合的に判断して、後期博士課程学位に相応しいとし、合格とした。